

遺跡発表 2. 富里市

まつのきだい 松ノ木台遺跡

— 猛き君を想ひ続けしムラー —

嘱託職員 宇井義典

遺跡の立地と周辺の遺跡

松ノ木台遺跡は富里市日吉倉字松ノ木台55-1他に所在する。日吉倉は富里市の北端に位置し、成田市に接している。京成成田駅から南東方向約700mということもあり、周辺はにぎやかな町並みとなっている。

地理的な状況を見てみると、台地の東側では根木名川が北に向かって流れており、西側は根木名川の支流により開析されている。また、根木名川は周囲の台地を深く開析したため、現在の日吉倉、日吉台の一角は北東方向に張り出した瘤のような地形となり独立台地を形成していた。そのため、台地上から周囲を見渡せる絶妙な景観が広がっている。

宅地造成により様変わりしてしまった台地の標高は約30mを測り、南東方向に行くに従い徐々に標高が高くなる。上記の環境を鑑みると遺跡が立地するには好条件を有すると考えられるが、1973年におこなわれた日吉台ニュータウン造成に先立つ文化財調査の結果では、遺構の密度はあまり高くない様子が示されている。台地上には古墳群が確認され、烏山古墳群と称されているが、比較的小規模な古墳群であり、西方の公津原古墳群、竜角寺古墳群といった大規模古墳群とは一線を画しているようである。

1973年の調査の成果

松ノ木台遺跡は現在まで2度の調査がおこなわれており、それぞれの調査で成果が上がっている。初めに1973年におこなわれた調査の内容を見てゆく。

広大な台地上で4ヶ所の遺跡が調査され、北から松ノ木台遺跡、からすやま烏山遺跡、ひがしだい東台遺跡、ふるやま古山遺跡と称されている（第1図）。以下に詳細を見てゆく。

- 1) 松ノ木台遺跡 平安時代住居跡1軒、土坑3基、古墳時代方墳1基（終末期）
- 2) 東台遺跡 古墳時代以降の住居跡2軒、土坑2

基、溝状遺構1条、ピット群

3) 烏山遺跡 弥生時代終末期～古墳時代前期住居跡5軒、古墳時代円墳2基（中期後半）

4) 古山遺跡 古墳時代前期住居跡7軒、古墳時代後期住居跡6軒

23,000㎡が調査されたにも関わらず4遺跡の住居跡を合わせても21軒しか検出されなかった。また、検出された住居跡は古墳時代前期と後期のものがほとんどであり、中期の住居跡が検出されていない。

しかし、ここで問題となるのは烏山古墳群（烏山遺跡）の2号墳のおおよその時期が5世紀後半、つまり古墳時代中期後半に相当するという点である。詳細についてはあらためて述べることにする。

1995年の調査の成果

2度目は1995年に宅地造成のため調査がおこなわれ、検出された遺構は堅穴住居跡36軒、土坑41基であった。本調査面積は3,300㎡であり、42㎡未満に1基あるいは1軒の割合で遺構が検出されている。前回の調査結果と比較すると、非常に密度が高いことが窺える。この2度にわたる松ノ木台遺跡の発掘調査区は隣接していたのであるが、対照的な結果となったといえよう。

成果の詳細を見てみるが、現在整理作業が中途であるため今後の進捗によっては多少の変更が生じることがあることを断っておく。住居跡の大まかな時期を見てみると、縄文時代前期7軒、古墳時代中期4軒、古墳時代後期～終末期16軒、平安時代6軒、時期不明3軒である（第2図）。

縄文時代前期に集落が形成されるが、その後長きにわたり空白の時期となる。そして古墳時代中期後半から再び人々の生活が始まり、後期に最盛期を迎えるという図式が描ける。小規模ではあるが古墳時代中期の終わり頃からのこの地で生活が始まったと

いうことは非常に重要なことである。既に記しているように、この台地上で確認されている遺跡で古墳時代中期の住居跡が検出されているのは松ノ木台遺跡だけなのである。

烏山2号墳とは

広大な台地上に展開した各遺跡は根木名川に開析された独立台地上に立地しており、谷津によって区切られている。遺構密度を考慮すると遺跡の間隔が非常に離れているという感覚に陥る。

重要なことは烏山2号墳（直径約27m・高さ3m）が構築された年代であり、その位置付けを与えた出土遺物である。この円墳から横刃板鋌留短甲（第3図-1）と呼ばれる甲冑が出土しており、これが流布するのが5世紀後半のことである。千葉県内では数多くの古墳が築造されているが、この甲冑が出土している遺跡は10遺跡程度しか確認されておらず、非常に貴重であることが理解できよう。

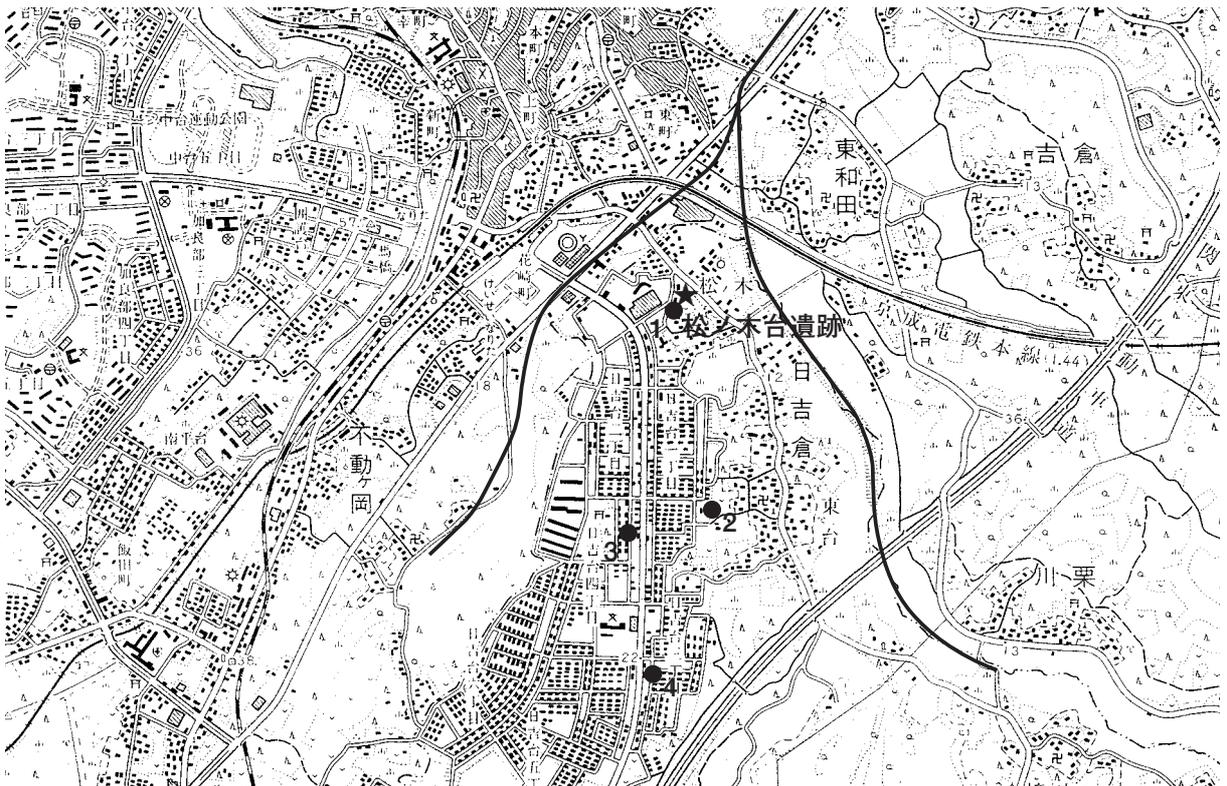
そして、大阪府陶器古窯址群の須恵器編年TK23に並行する有蓋高坏（第3図2～11）が出土していることも重要である。この型式より一段階古いTK208は、陶器で須恵器が定着する型式とされており、5世紀後半の年代が与えられている。

一猛き君一

烏山2号墳に甲冑が副葬品として埋葬されたことを記したが、この古墳の被葬者はどのような人物であったのであろうか。畿内産の須恵器が搬入され、軍事の象徴とされる甲冑（短甲）が拝領されたことを考慮すると、軍事に秀でた首長であったと解することができよう。この台地一帯はそのような性格の首長が治めていたのではないだろうか。

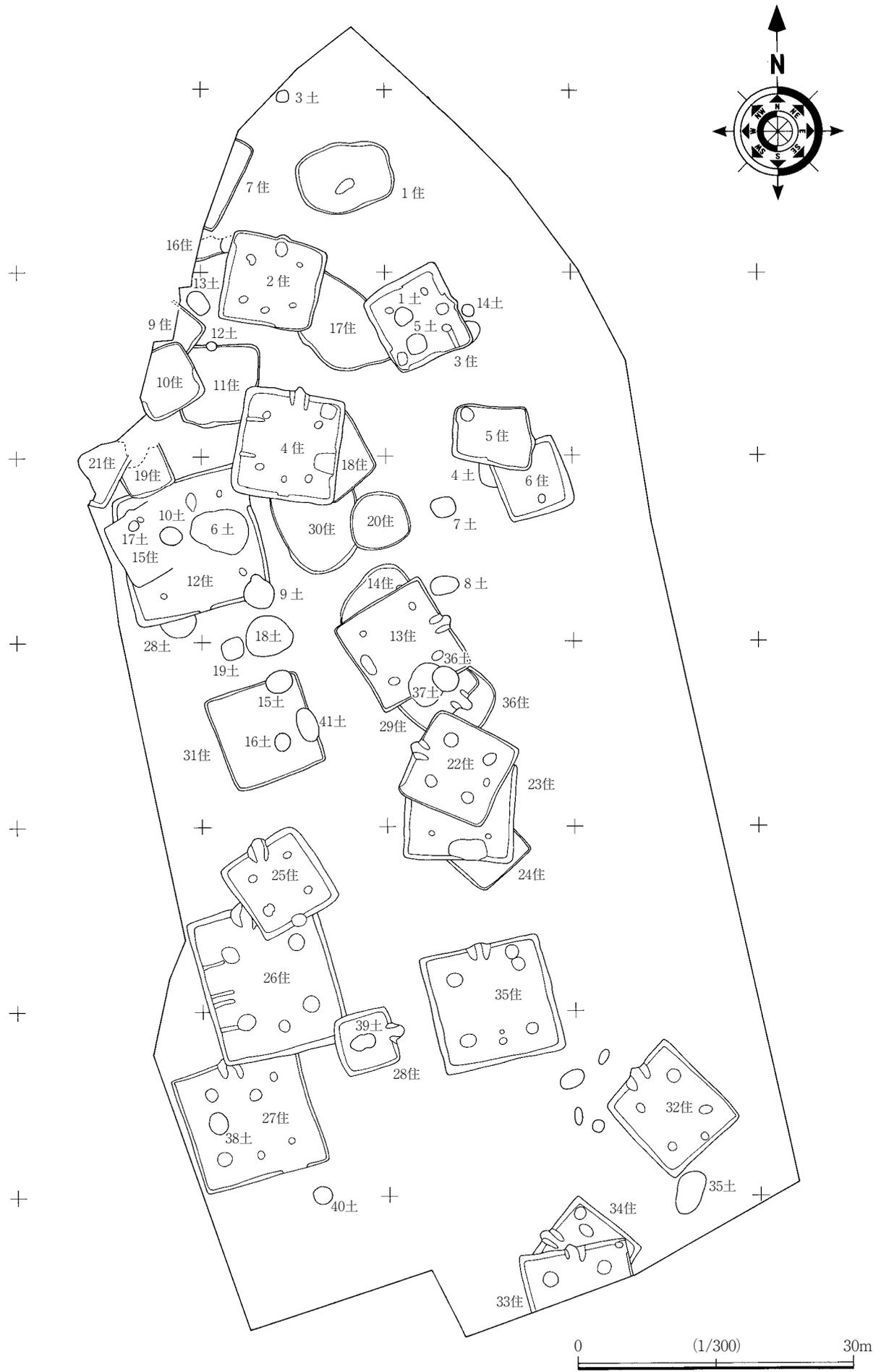
烏山遺跡における弥生時代終末期の住居跡から始まり、古山遺跡・東山遺跡・松ノ木台遺跡に至るまで長きに渡り集落が継続している様子は古墳の被葬者と無関係ではあるまい。出土遺物から烏山2号墳の時期が5世紀後半であることが明らかとなったが、その時期の集落はまさに松ノ木台遺跡として姿を現した集落なのである。

近くには青銅鏡が出土した松ノ木台2号墳があり、古墳時代の終わりごろになっても台地一帯は依然として社会的に高い位置付けにあったと考えられる。そのような首長が黄泉の国に旅立つのに前後して再びムラが形成され後期にまで継続されるのは、君の眠る丘をいつまでもこの地で見守り、想い続けたためなのであろうか。

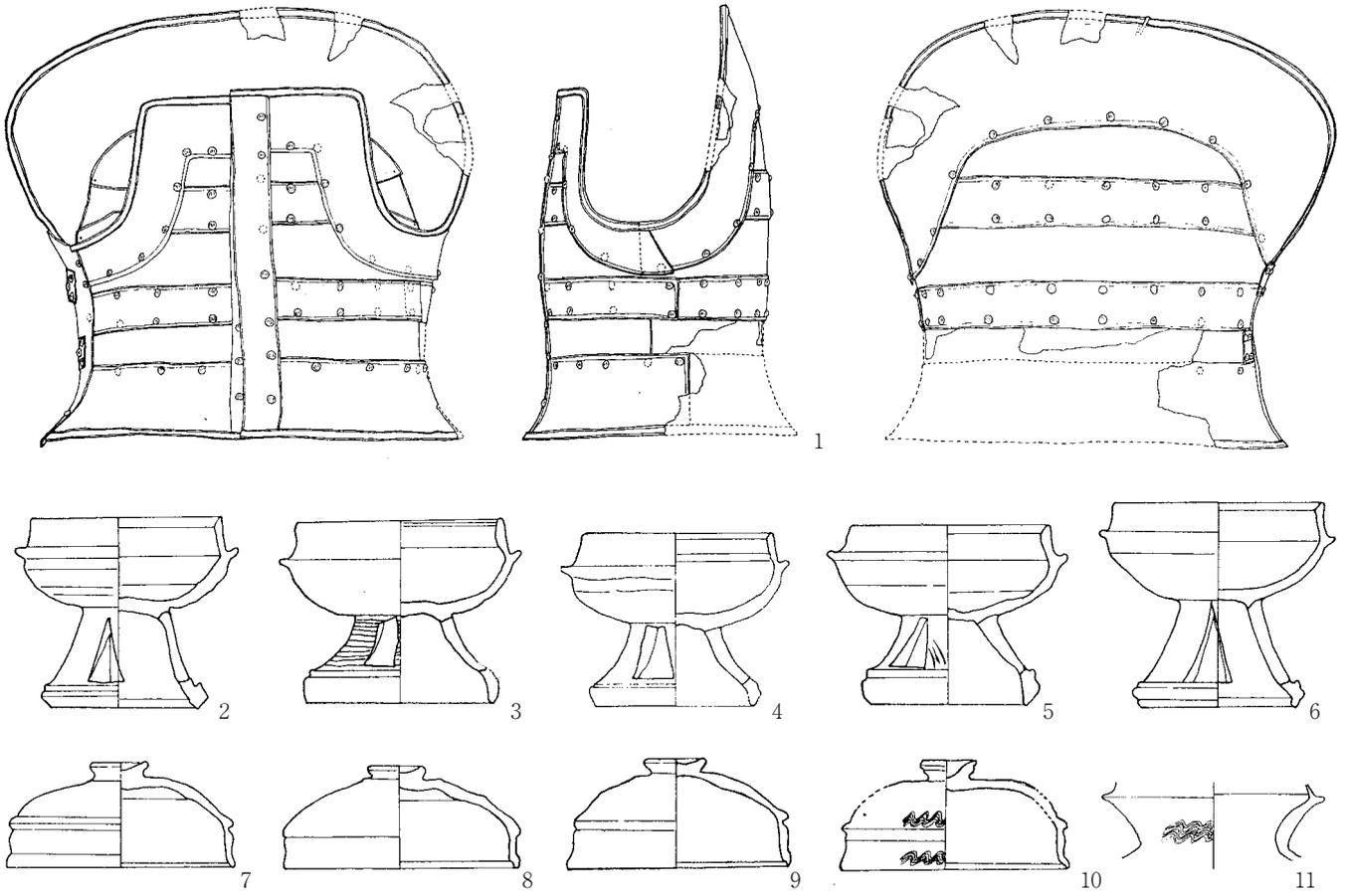


第1図 遺跡位置図（S=1/25,000）

※ドットは本文中の番号に対応



第2図 松ノ木台遺跡遺構配置図



第3図 烏山2号墳出土遺物



12号住居跡出土遺物



23号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物